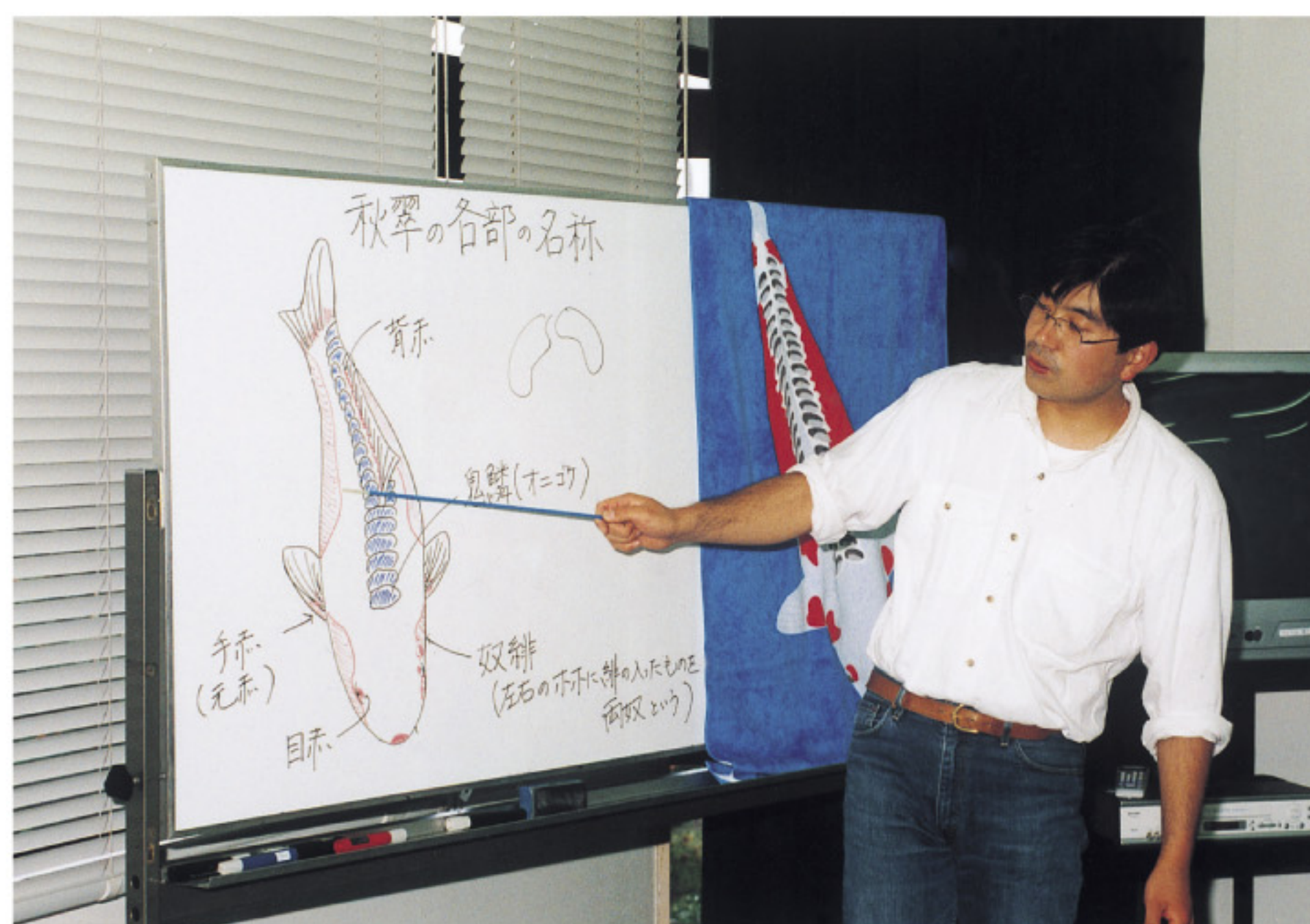


秋翠への招待

将来性を見抜く 観点と要点 前編

横浜錦鯉・大菊拓朗



講演会

平成 15 年 5 月 3 日 (祝)
金沢産業振興センター

錦鯉ほど多くの品種を持つ観賞魚は存在しないが、人気は御三家に偏り、それ以外の多くの品種は日頃、軽く見られがちで不遇をかこっているのが現状だ。好みが集中することは仕方のないことだが、あまりにも世間の風評に流されてはいないだろうか。各品種はそれぞれ独特の美しさと魅力を持ち、奥の深さも御三家に引けをとるものではない。秋翠もそのひとつだ。

その秋翠を正面に取り上げた講演会が5月3日(祝)、横浜市金沢区の産業振興センターにおいて開催された。御三家およびその周辺の人気品種についての集いは珍しいものではないが、はつきりいつて、アウトサイダーの品種にスポットを当てたのは業界初のことではないだろうか。期待にそぐわず、その内容は参加者を飽きさせない充実したものがあった。

前編では秋翠の歴史や一般的な概念、そして「秋翠にも系統がある」といった具体的な内容を中心に掲載した。

秋翠のはじまり

明治43年生まれの「江戸っ子」 ドイツ鯉と浅黄の交配により

今日は秋翠について、どのようにすると将来性のある鯉を選んで楽しめるかを、これまで販売してきたものを教材としてスライドにしてありますので、それを見ながら実際の変化を勉強していきたいと思います。

鯉のことですから、100%の正解があるわけではありません。絶対ということはありませんが、経験則上で得たことを少しお話できればと思っています。

まず、秋翠の歴史についてお話ししたいと思います。秋翠が誕生したのは今から90年以上前の明治時代の終わりごろです。今日の東京水産大学の前身の組織があり、そこで講師をされていました、初代の秋山吉五郎さんが秋翠を作られました。最初の交配は、錦鯉の原種とされている浅黄にドイツ鯉を合わせたそうです。それが秋翠の原点です。親鯉となった当時の浅黄は皆さんがいま連想されるような浅黄ではなく、真鯉に近いような汚い感じがする……昔

は浅黄三色と言っていた種類の魚でした。三州鯉という言い方もされていました。

ドイツ鯉は食用の黒い真鯉ですから、鱗が少なくて食べやすいということで日本に輸入されたものです。その黒いドイツ鯉に色を付けようと、秋山さんが苦心の末、作られたということなのです。

最初に作られた秋翠は、いま見るような秋翠ではなく、体の横の側線にも鱗がある、鏡鯉という形の魚で、今ならば、鱗が不揃いのため選別で撥ねてしまうようなものだったそうです。しかし、色のコントラスト……赤とブルーがこれまでにない色合いだったため、それを見た人は本当にびっくりしたと思います。

当時、東京水産大学の学長をされていた松原新之介さんが、明治43年（1910年）秋翠と命名しました。秋山さんが作った鯉ですから、秋山さんの秋の字を取り、秋山さんが作った翡翠色……翠色の鯉という意

味から正式に命名したと言われています。

それ以来、改良をされて今ではこれだけ綺麗な秋翠が出来ているわけですが、輸出が盛んになってきたので、アメリカの人たちには特に人気があると言われています。それは星条旗のカラーリングと同じであるためです。日本人が紅白が好きなのは

秋翠の鬼鱗の特徴

ドイツ鯉でも紺色の鱗を持つ 紅白にはない紅色の独自の緋

現在、秋翠はいろんなところで作られています。広島、奈良の大和郡山、新潟でも作っています。秋翠の歴史はまだ100年にも至らなくて浅いものですが、ここまで品種改良がされて綺麗なものを見ることができるようになりました。

実際に、秋翠をどのように見分けるか、おもしろさを発掘することが出来るかを考えてみますと、まず、他の鯉にない特徴は鱗並びにあるとされています。他のドイツ鯉を見てみると、鱗に色が付かないものがほとんどです。例えば、ドイツ紅白やドイツ三色は鱗が透明であったり、

日の丸……国民色といいますが、そういう配色に安心感、ホッとするようなものを持っているためかもしれません。

秋翠は同じように、アメリカ人には秋翠の赤とブルーのコントラストとが強いインパクトを与えるため、受け入れやすいのかもしれませんが。

あるいは白だったり、多少模様が入った時に、その色彩が少しかかったりすることがありますが、基本的には透明の鱗が付いています。秋翠の場合は、特に背中などの鱗が独特の色合い、紺色をしています。これが他のドイツ鯉にない特徴と言えると思います。

明治時代に最初に出来た時は、側線部分にも大きな鱗があつて、それが紺色をしていたと言われていますが、現在の秋翠にはそういうものはほとんど見られません。側線の部分に鱗があつても、透明なものが少しあるだけです。それは進化したのか

退化したのか、わかりませんが、そのような状態にあります。ドイツ鯉を鏡鯉と革鯉とに分類しますが、現在のような秋翠の鱗の付き方を「華鯉^{はなごい}」とする人もいます。

鯉の中心より手前の鱗並び、その

鱗を鬼鱗^{おにごけ}という言い方をする生産者もいます。その大きな鱗にも独特な魅力があります。また、体の緋、体側に付いている赤い色が、紅白にはない紅色^{くれない}をしていることに魅力を感じる方も多いようです。

秋翠の緋盤と黒化について

浅黄と同じ基本、応用も大切 黒化は発祥の地の水質が影響

秋翠の見方の基本は、元々が浅黄をベースにして作られたものですから、浅黄^{なは}の見方に倣^{なら}っています。体の

て余りあるものだと思いますので、基本はそうですが、「絶対にこうあるべき」というのはないと思います。

の左右対称に緋盤が入ったものを基本としています。また、目のところにあるアイシャドーのような感じの「目赤」とか、頬が赤い「奴緋^{やつこひ}」、両方の頬に緋があれば「両奴」という言い方をしますが、それらの体の緋がひとつの見せ場になります。さらに、手鰭、尻鰭、尾鰭、背鰭の元に赤を持っていることも基本的な良さの見方になります。

そのほかの基本的な見方として無駄鱗^{むだごけ}がないことも大切です。また、頭の美しさが大切です。頭の部分が綺麗に禿げ上がっている美しさです。銀杏色とも言います。あとは体全体にシミが少ないものが良いとされています。

しかし、それらが揃っていないければいけないかと言うと、そうではないと思います。いろいろな価値観がありますので、元赤がなくても、他のところが美しければ、それを補つ

このように秋翠の見方は浅黄に準ずるような形になり、あとは少しずつ変化をしていきます。書道でいえば、草書のように少し崩してみような見方もあるかと思いますが、基本は以上のようなことだと思います。

一方、秋翠の最大の欠点は黒くな



●熱心に耳を傾ける参加者

ることです。これは浅黄にも言えることです。秋翠を飼われた方は少なからずそのような経験をされたと思います。秋翠は水を選ぶとか、水質を選ぶと言われています。軟水が理想だとされています。というのは、元々、作られた方式が錦鯉の育て方と違いました。作出者の秋山さんは千葉県の浦安ですので、金魚が有名な江戸川あたりで養殖をされたわけですから、溜まり水で鯉を作るという方式でした。

新潟では山から湧き出している湧水で鯉を育てていましたが、秋翠は

アオコが発生するような溜まり水で作られたところに、今までの錦鯉とは生産の仕方が少し違った面があると思います。

そのために、もしかすると水質を選ぶ……または色合いからしても、そのような傾向があるのかもしれない。

秋翠の将来性を占う

口先の抜け具合で黒化の予測 背赤の秋翠は？最適な色揚げ

秋翠は頭に曇りが無いことを理想とします。当才を見ればわかりますが、頭の芯のところに黒い筋のようなものが入っていたり、少し暗くなっていたりしている魚がいます。これをチヨボ墨と言います。秋翠の場合、人間の蒙古斑もうこはんのようなもので、当才のうちには大概の魚にありますが大きくなれば消えていきます。したがって、それが体の黒化につながることはないと思います。

当才でどこを見るかと言いますと口先です。目よりも先の肌の抜け具合が、どの程度なのか……その抜け具合が大きくなった時の頭の綺麗さの判断材料ですから、注意をすれば簡単に見分けることができると思います。

鱗の色合いは、秋に稚魚池から揚げてきたばかり……10～15cmぐらい

の当才は、鬼鱗や背中中の鱗は紺色をしていません。ほとんど透明に近いような色で……早生の鯉は色がうつすらと出ているような感じで、ともすると、ドイツ紅白のような印象を受ける鯉が多いです。そのような鯉は後から鱗の色合いが出てきますので、当才の時に白っぽいものであっても、鱗の並びさえ確かならば綺麗になつていくと思います。

「背赤の鯉が良い」と、かつて新潟の重蔵さんが『月刊錦鯉』の中で語っていましたが、背赤というのは実は当才では絶対にいません。当才で背赤の鯉を探しても1匹もいないと思います。背赤は2才から出現してくるものなので、それを望むならば、2才以降を探すようにしていただきたいと思います。

背赤がなぜ出てくるかと言います

と、緋が伸びる時に、手の緋が先のほうに進むのと同じように、背鰭にも緋が出てきます。ですから、背赤が出る鯉は緋が強い鯉、緋に勢いを持った鯉だと思われます。

緋模様のキワ……模様の境界線のところですが……滲んでいたり、ボケていたり、緋ギワの悪い魚は、緋が飛ぶ可能性が非常に高い……あるいは逆に緋が伸びてくる可能性も強く、緋が動きやすいという判断材料となります。

秋翠の緋色は独特なので、美しさを感じる要因のひとつになります。しかし、その緋は当才の時には薄かったり、黄色かったりしていますので、何とか秋翠レッドにしたいと考える方もいます。どうすればよいかなとなると、色揚げ飼料で揚げるよりも、ニンジンで揚げたほうが秋翠の赤は綺麗に揚がります。色素の影響だと思いますが、例えば、私はニンジンのジュースなどを餌に混ぜたりして与えています。そうしますと、赤がより一層鮮やかになつてきます。一度試してみてください。

地体の色、鱗がない皮の部分は、「白っぽいものがよい」とよく言われます。それは浅黄の当才の見方で

す。秋翠の場合は、立てた人に聞くと、必ずしも白っぽいものが良くないとはいえないと思います。ですから、肌の色は白が強くなければいけないことはないと思います。

ただ、立てようとする鯉は、地体にくすみがないほうが良いと思います。青でも少しくすんだような青……色を二枚重ね、三枚重ねたような青……澄み渡る青ではない鯉は、メラニン色素を持っているといえますか、黒くなりやすい傾向があると思います。

ですから、白っぽい鯉が良いわけ

ではなく、逆に白が強すぎると、大きくなった時にドイツ紅白のような感じになってしまう鯉もあるようです。

これまで自分なりに飼ってみて、理想の秋翠の色合いは、頭の部分と体の皮の部分に色のギャップがある鯉が良いと思います。体が水色で、頭の部分が銀杏色といえますか、少し黄色を含んだような色合いで、はつきりとした色の段差がある鯉です。頭も体も同じような色合いをしている鯉よりも黒化が進みにくいような気がします。

秋翠の体型と楽しみ

体型的にドイツ鯉のハンディ 3才まで劇的な変化を楽しむ

体型に関しては、ドイツ鯉の宿命でもあります。メスですとぼつちやりして、腹が垂れ下がる傾向が見受けられます。その体型になりにくい鯉を選ぶとなると、体高のある魚とか、頭の造りのしっかりしたものとか、それはどの品種にも言えますが、それらを特に意識して選べば、大きくした時に見映えのする体付きになると思います。ドイツ鯉の場合

は、尾筒が細く感じたり、少し短く感じたりするものが多いので、そのあたりが選び方のポイントになってくると思います。

すぐに仕上げて品評会で楽しみたいならば、ブルーの地体が綺麗なものが品評会では強いと思います。現状の品評会の審査方法では、鱗並びの綺麗な鯉が上位に入っていますので、緋模様というより鱗並びがしつ

かりしている鯉のほうが強いと言えるかもしれませんが。ただ残念ながら、そのような鯉は黒化が進みやすい傾向がありますので、即品評会Ⅱ花盛りで、あとは散ってしまうということもありえます。

当才から2才まではどの品種でも劇的に大きくなりますので、激しい変化を見ることができます。当才を求めた場合は土池で飼っていただくと急激な変化を楽しむことができます。また、2才から3才までの変化は、特に体型に現われてくると思います。3才になる段階では大人びた体になりますので、体型がしっかりとてきます。

また、背赤も2才から3才で出ます。2才で全くなかった魚でも3才になって出ることがあります。その点も楽しんでもらいたいと思います。

秋翠は80 cmや90 cmと超ジャンボに

玉浦産・2才から3才への変化

鱗に色が出て、鱗並びに特徴 緋が増える傾向を見せ始めた

(以下スライド映写による解説)

この鯉(写真①—A)は2才の時

なる品種ではありません。だいたい3才から4才が完成する年齢になりますので、花を満開に咲かせるにはちょうど良い時期だといえます。もちろん中には例外もあり、大型になつて花を咲かせる鯉もいます。

の姿です。広島玉浦産の秋翠です。基本的な見方をすると、目赤、頬赤、

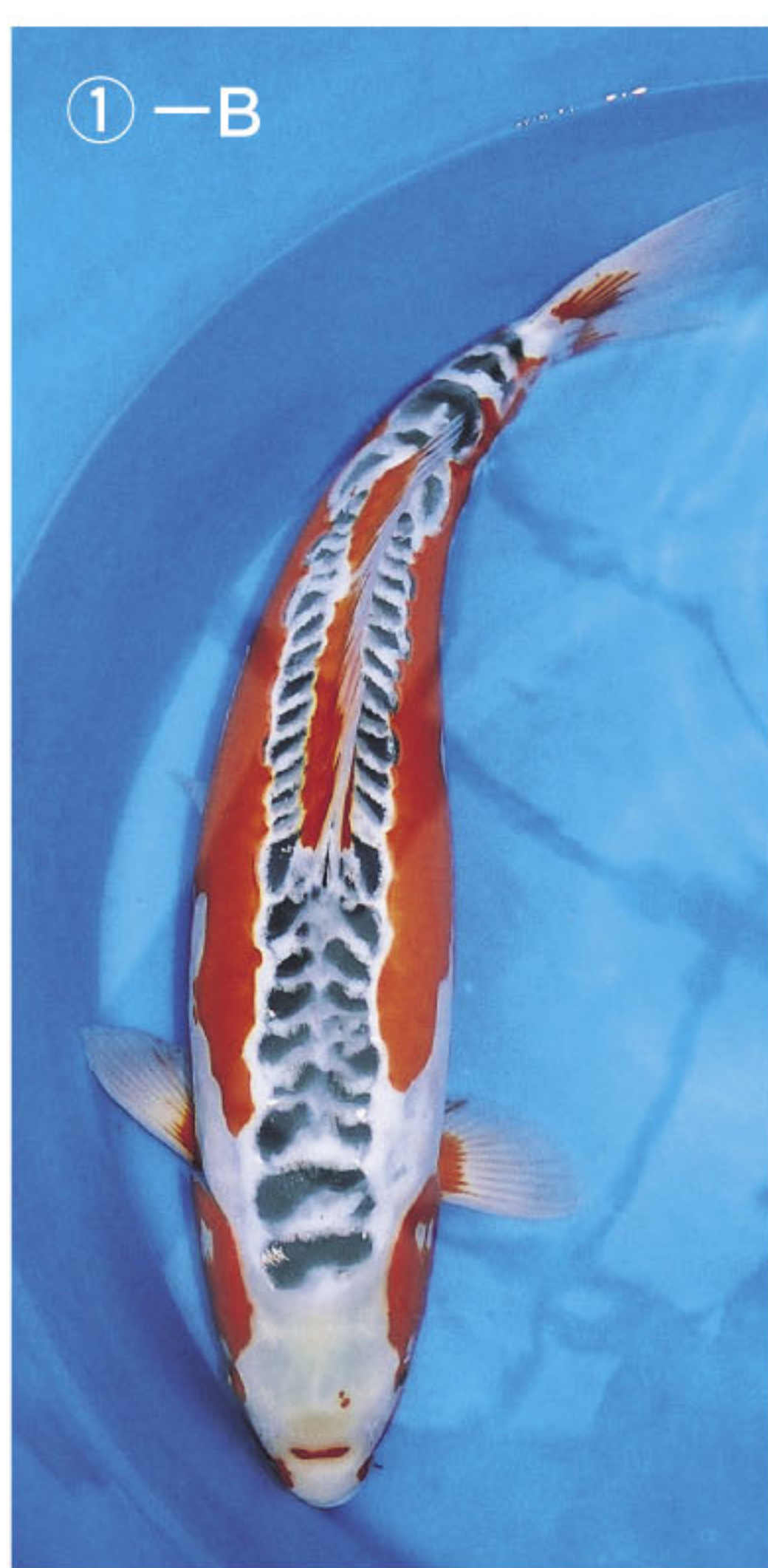
手赤、背赤があり、緋盤が左右対称に入り、鱗の並びも無駄がありません。基本的な員数がそろっている魚だと思います。欠点を言えば、細かい飛つ緋がありますが、それをどのように評価するか、それは別の問題になると思います。

頭の色は真つ白ではなく、少し銀杏色をしています。鱗の色合いは、まだ鱗目がはっきり出ていない鯉だと見ることができます。

この鯉を泥池に入れて半年後にどのような変化をしたかといいますと、これ（写真①—B）がその姿です。大きさが10cmぐらい伸びていますので、多少の変化があると思います。明らかな違いは、鱗にはっきりと色が出ていることです。それと同じに緋の色もはっきり出ています。これは2才から3才の変化ですから、ボリユームも少し付いて大人びた体になってきています。それと、



●写真①—A／広島・玉浦産秋翠（2才時）。基本的な秋翠の要素が揃っているといえる



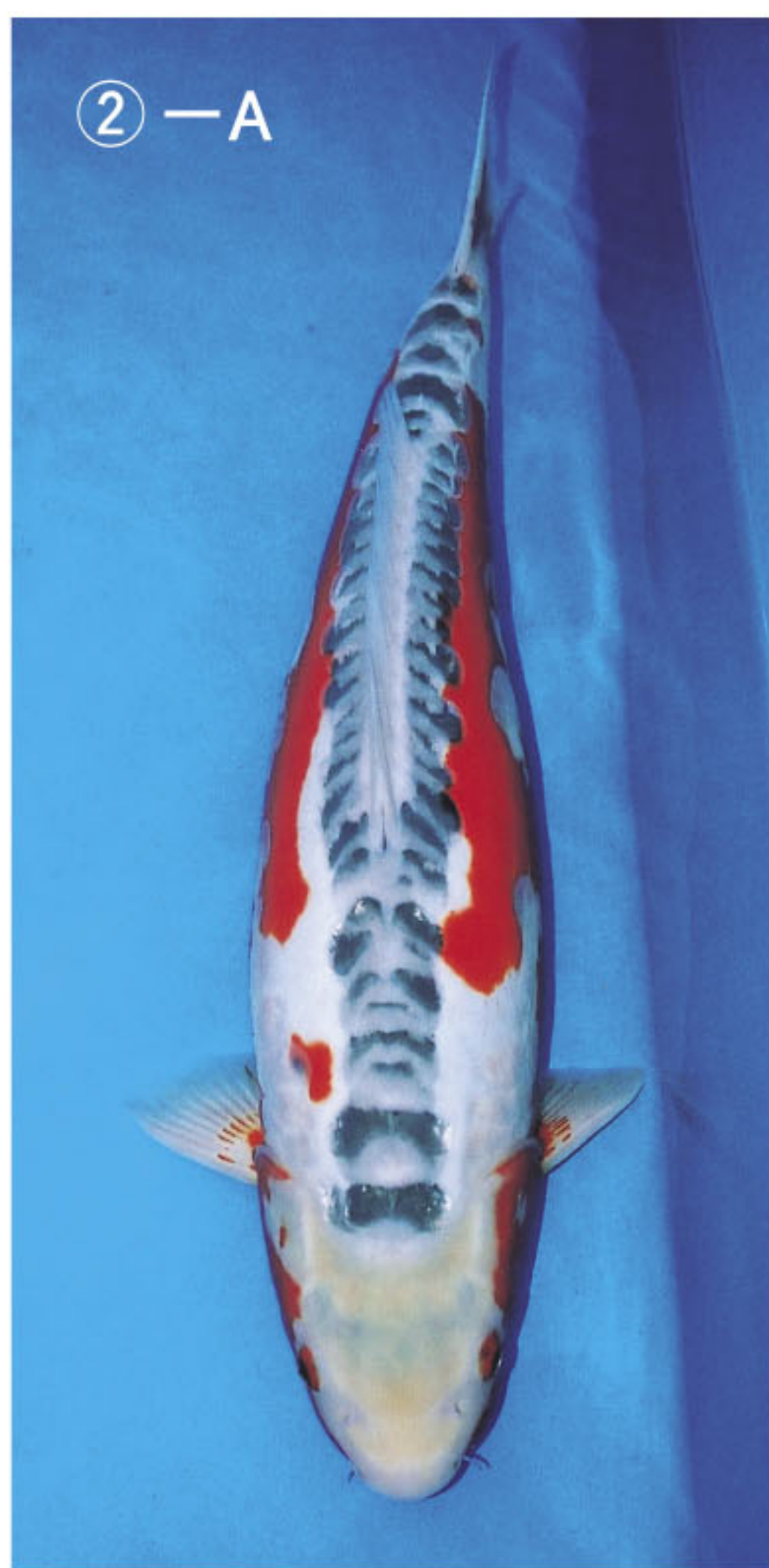
●写真①—B／Aの半年後の姿。鱗にはっきりと色が出てきた

両奴は頬の白地がAのほうが多かったのですが、Bでは緋が増えてきています。同時に元赤も少し拡大しています。ですから、この鯉は緋が増える傾向があると思います。緋が増える傾向の魚は背鰭に赤を持つ方向に進むと思われます。そして、大きくなつてくると、体と頭の色合いの段差がだんだんなくなつてきて、同

玉浦産・3才から4才への変化

鱗の並びで秋翠の系統を知る 背赤が出てきて緋は増加傾向

秋翠の系統は紅白や三色と同じようにあります。その見方は鱗の形に現れてくると思います。鬼鱗の形が一枚鱗のものと、二枚ずつ左右対称に並んでいるものと、2種類の系統があると思います。広島玉浦産の



●写真②—A／玉浦産の3才。鬼鱗に玉浦系の特徴が現れている

ると思います。

次は玉浦産の別の秋翠で、3才から4才の変化を見ます。これ（写真②—A）は3才です。先ほども言いましたが、鬼鱗は頭に近いほうは大きな鱗が並び、途中から2列に分かれています。玉浦産の系統の特徴です。この鯉も目赤、頬赤、手赤があり、背赤はありませんが、基本的な模様をしています。鱗並みもまあまあよいと思います。頭の色合いも曇りがない魚です。

これを土池に入れて半年後にどのようなになったかというところ、これ（写真②—B）がその姿です。背赤が出ました。3才でなかったものが4才で出ました。遅くなっても背赤が出る鯉がいます。背赤のほかに奴の緋も少し増えています。ですから、背赤が出る鯉は緋が増える傾向がありますので、体のほかの部分の緋も多少伸びるような変化があるように思われます。



●写真②—B / Aの半年後。背赤が出てきた

阪井産・当才から2才への変化

三日月形をした鱗の形が特徴 頭の緋が減る傾向が見られる

次は阪井産の秋翠です。春の当才（写真③—A）です。阪井産の秋翠は奈良県の大和郡山の鯉が初代の親として来ています。そのために鬼鱗が最初から2列の配列をしています。また、鱗の形は三日月形のもの

が多いです。それらが阪井産の秋翠のひとつの特徴だと言えると思います。この鯉に元赤はありませんが、左右にリボン模様の両奴を持った基本的な秋翠です。

その鯉が半年後の2才はこの姿（写真③—B）になりました。当才の時は鬼鱗が白っぽかったですが、2才で鬼鱗の色がはっきりと出てきています。小さい当才を選ぶ時に、鱗がはっきりと出ていないと駄目だと言われる人もいますが、半年飼いで込んでいただくと、このように綺麗になってきますので、鯉を信じて飼って欲しいと思います。

また、おもしろいことが見られます。それは口先の緋です。当才の時には口紅が団子を二つくつつけたようにつながっています。それが2才では少し離れています。口に近いほ

うの緋はわずかに縮んでいます。そんな大きく減っていません。でも、後ろの緋はかなり小さくなって、模様が完全に二つに分かれてしまいました。さらに奴の緋も小さくなっ

●写真③—A / 広島・阪井産秋翠（当才時）。



ています。

阪井産の秋翠に関しては、前半の
緋が減る傾向があります。したがっ
て、少し重い感じのする緋模様であ
っても、大きくなった時に緋のバラ

ンスがちやうどよくなる可能性があ
ります。これは阪井系統の秋翠に限
つてのことですが、言えると思いま
す。



●写真③-B/Aの半年後。鬼鱗の色が
はっきりと出てきた。第31回振興会
関東甲信地区大会で35部優勝してい
る

阪井産・3才から5才への変化

年々ボリュームが付き種別に 2列の鬼鱗が阪井秋翠の特徴

次も阪井産の秋翠で3才（写真④
—A）です。目赤もあり、頬赤は少
し小さいですが、背中も綺麗に
並んで……右肩に1枚の無駄鱗があ
りますが、3才ですから体も大人び
て、きちつとしているほうだと思
います。

体にボリュームが付きました。緋ギ
ワが少し詰まってきました。Aでは
伸びたような感じがありました。が、
キワがシャープになりました。また、
頬もひと色締まったような感じ……
オマケとしてちよつとジャミも出
ています。4才ではそのような変化を
見せました。

その鯉を泥池に入れて半年後の4
才では、この姿（写真④—B）にな
りました。まず、餌をたくさん食べ

さらに5才立てをすると、この姿
（写真④—C）になりました。頭が



●写真④-A/阪井産の3才。第27回
神奈川県錦鯉品評会・種別県一賞



●写真④-B/Aの半年後。ボリュームがつ
き、キワがシャープになった。第34回東
京大会で75部優勝



●写真④-C/5才になり頬の緋がなくなっ
た。第35回東京大会で種別日本一賞を受
賞

綺麗になって良く抜けましたが、これは体調のせいもあると思います。がって、前半の緋が動く傾向があるような気がします。

最も目に付くのは、頬の緋がなくなってきた点です。整形はしていませんよ。背鰭の元赤もわずかですが、出てきています。ボリウムもさらに一回りついて、今年の東京大会で種別日本一賞を取らせていただきました。鬼鱗は最初から二つに分かれて、向としては、前半の緋が減り……この鯉（写真④）も同様です。といつても、体の緋が減ったかというところ、あるところが阪井系統の特徴です。体の緋は一切動いていません。した

重蔵産・当才から2才への変化

口先の白地の抜けに最重点を 緋が後になって出てくる特徴

秋翠と言えば新潟の山重さん、重品評会に出品した時の姿です。

蔵産の鯉がお馴染みだと思いが、次は重蔵産の秋翠を取り上げてみたいと思います。当才（写真⑤—A）です。当才ですが春の全国若鯉

のようなもので、当才の秋翠には絶対的にあるものなので、これが全身の黒化につながることはないと思います。

この蒙古班よりも、口先の部分が綺麗に、はつきりと抜けている鯉を探すことに重点を置いたほうが良いと思います。

その当才が半年後にどのような

るか……この（写真⑤—B）ようになりしました。体の緋模様はほとんど動いていません。しかし、頬に緋が出てきました。重蔵産の秋翠は、阪井産の秋翠と違って、頭の緋が後から出てきます。当才では見られなかった「奴緋」が、両頬に出てきています。

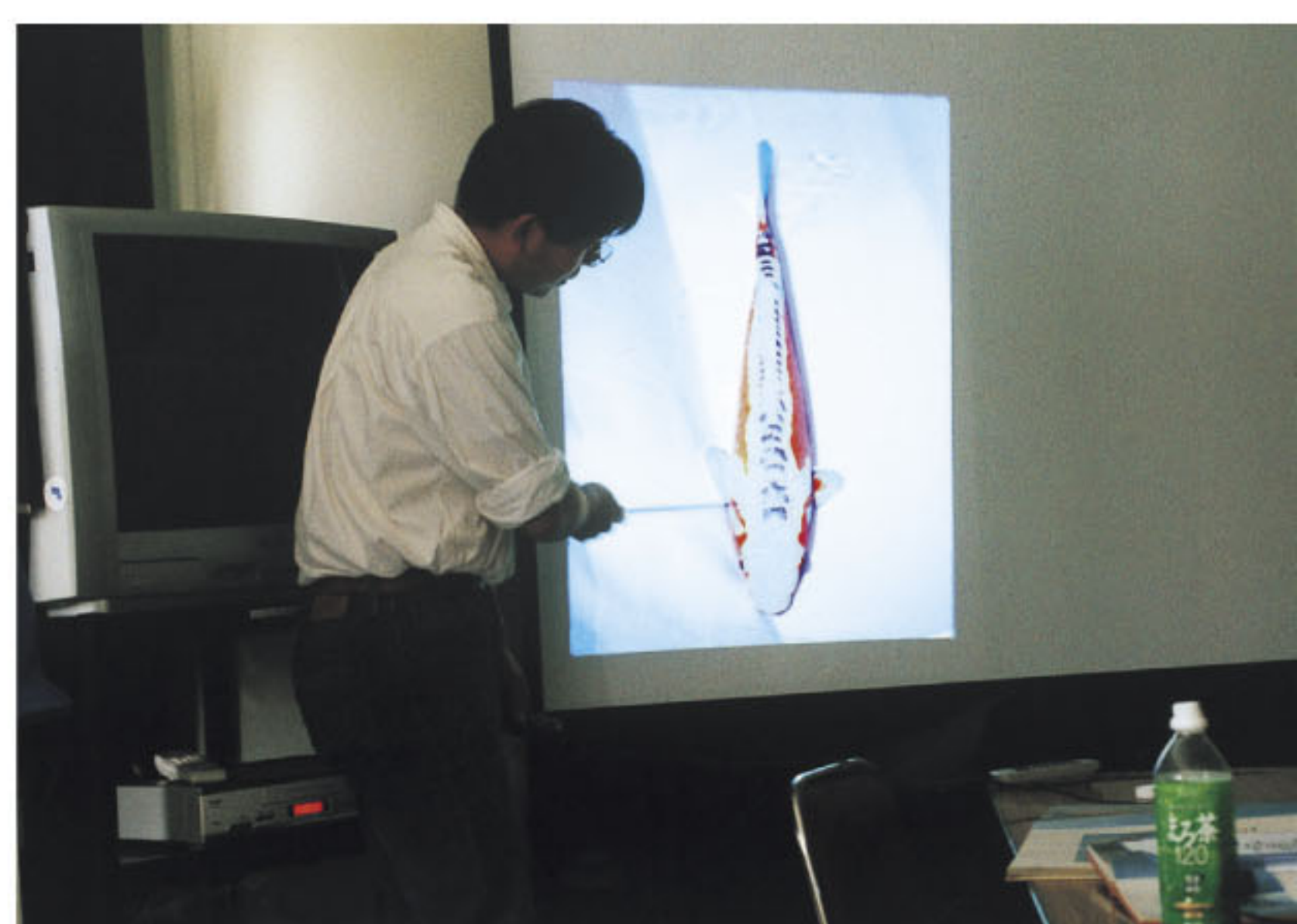
また、当才では頭の曇りが気になりましたが、その曇りがなくなってきた、すっきりと剥けてきました。この時（写真⑤—B）東京大会の35部で優勝をしました。



●写真⑤—A／新潟・重蔵産の秋翠（当才時）。第17回若鯉大会18部優勝



●写真⑤—B／Aの半年後。頬に緋が出てきた。第35回東京大会で35部優勝



●スライドを使って説明する大菊さん

重蔵産・2才から3才への変化

頬の奴緋と背赤が顕著に充実
薄い色の鬼鱗が綺麗な紺色に

次は重蔵秋翠の2才(写真⑥—A)です。この鯉は緋が少なめで、青地を見せる「さつぱり」としたタイプの鯉です。手赤、頬赤も小さい時からあり、背赤もうっすらと見られ、綺麗な秋翠です。

それを土池に入れて3才立てした姿が、これ(写真⑥—B)です。餌食いが良くて少しポッチャリしすぎたかなという体型的な変化はあるとして……重蔵秋翠は頬赤が拡大する傾向があると言いましたが、3才で



●写真⑥—A／重蔵産の2才。緋の少ないタイプ。第29回振興会関東甲信地区大会で35部優勝



●写真⑥—B／Aの半年後の姿。頬赤が増えている。鱗の色も濃くなってきた

は実際に赤いアイシャドーを塗ったように増えています。背赤の緋の量もかなり増えています。

体の緋はそんなに動いていませんが、顔の見せ場となる緋が重蔵秋翠の場合には増えるような傾向がありました。

重蔵産・阪井の血を入れた当才から2才への変化

ミックスの系統が鬼鱗の形に
頭の緋盤も増えていく傾向が

この鯉(写真⑦—A)も重蔵産の秋翠ですが、タイプが違います。こ



●写真⑦—A／重蔵産の当才。イを親にもつ。33回東京大会30部優勝

●写真イ／Aの親の阪井産秋翠。第31回東京大会で種別日本一賞を受賞している





●写真⑦—B／Aの半年後。重蔵産と阪井産の両方の特徴が現れてきた

生が所有され東京大会で種別日本一賞を受賞されました。それをメス親にして、重蔵産のオスを掛けて採ったものです。したがって、今までのタイプとはちよつと違う系統の鯉になっています。

重蔵秋翠というのは、肩のはじまりから背鰭までの鬼鱗が同じように連なった一枚鱗をしているんですが、この鯉（写真⑦）を良く見ればわかるんですが、先ほど言った阪井系統の特徴である三日月形の鱗が、1本の鯉の中に中間的に出ているような感じがします。

三日月形に二つ入った鱗が付いている部分と、離れている部分があります。これは二つの系統がミックスしてこのような形になったわけで、鱗の形に表れてきているのだと思います。

これ（写真⑦—A）は当才ですが、半年後にはこのような姿（写真⑦—B）になりました。緋が増えました。これまでの阪井産の秋翠は頭の部分

の緋が減るということでしたが、重蔵系統の増える特徴が乗って、奴緋の面積が広くなり、目赤もはつきり出てきています。また、体の緋盤の色合いもかなり強くなっています。そして、当才の時には背赤がなく、手の元赤だけでしたが、2才では背赤が見られるようになりました。

重蔵産・阪井の血を入れた2才から3才への変化

鱗の色が薄くなる遺伝を見せ
鱗の根元の部分が薄く感じる

先の鯉（写真⑦）と全くの兄弟鯉 緒の2才で、これ（写真⑦—B）もこれがこれ（写真⑧—A）です。年も一2才です。親が同じですからすごく



●写真⑧—A／重蔵産の2才。写真⑦の兄弟鯉。

似ています。鱗の色合いも、鱗の形状も……。それと、体のつくり、頭の色合いからも、やはり兄弟だなど感じさせます。

これ（写真⑧—B）が3才の姿です。どのような変化があると思われるか。なかなか気が付かないと思いますが、鱗の色が薄くなっているんです。今までには見られなかった変化です。阪井産の種別日本一を取った鯉（写真④）も、年を追うごとに鱗の色が薄くなっているんです。そのために、片方に阪井産を使ったこの鯉（写真⑧—B）も、大きな



●写真⑧—B／3才時の姿。鱗の色が薄くなっている。「阪井産の遺伝かもしれない」(大菊さん)

るごとに鱗の色が薄くなる傾向があり、遺伝しているのかなと、おもしろく感じられるところです。

緋盤については、ポリウムがついたくらいでほとんど変化は見られません。

鱗の色が薄くなったことについては、三日月形の鱗……先が黒くなつて、中心が白っぽくなって……それぞれ

重蔵産・阪井の血を入れた3才から当才秋の姿を追う

3才で緋ギワが綺麗に締まる 鬼鱗も見えない当才池揚げ時

もう1本、和田秋翠(写真イ)を親にした同じ兄弟で、重蔵さんが作った鯉(写真⑨—A)がいます。3

才の時の姿です。この鯉も先黒と言いますか、鬼鱗の先のほうが濃く、元のほうが薄い感じがして、先の鯉

(写真⑧)と同じような鱗の特徴が出ていと思います。

この3才を、今までとは逆に年齢を戻してみます。2才の写真(写真⑨—B)はポラロイドですので、色

が見にくいかもしれませんが、半年前

のほうが、写真の影響かもしれないが、3才よりも鱗の色が濃く見えると思います。実際でも、2才の時のほうが鱗は濃い色をしていました。

ただ、緋ギワは、この時(写真⑨—B)2才)は悪かったんです。今にも千切れそうで、ギザギザとしていました。こちら(写真⑨—A)3才)は綺麗に、シャープになりました。半年間で締まってきたわけです。

この2才をさらに年齢を逆に戻した春の当才(明け2才)の姿がこれ(写真⑨—C)です。写真の写りが悪いですが、良く見れば同じ鯉だとわかんと思います。当才(写真⑨—C)より2才(B)が濃くなり、3才(A)では薄くと、毎年交互に色が変わっているんです。この鯉はおもしろいことに、体が伸びた時に鱗の色合いが変化するような感じがします。

緋の色はこれ(写真⑨—C)が春で、これ(写真⑨—B)はその秋の姿ですが、緋模様が少し変化していると思います。当才から2才から体の模様が多少動くのは、これはどの鯉にも言えるんですが、秋翠は春の当才から秋の揚げりまでは、結構緋

⑤養鯉場 特約店

●錦鯉飼育士(第16号)

ヨコハマポンドメンテナンス

●優秀錦鯉販売 ●池設計施工 ●出張管理

新住所 横浜市瀬谷区阿久和西4-20-29
☎ 045-362-4151 携帯 090-9675-5613

YOKOHAMA
Nishikigoi

横浜錦鯉 大菊拓朗

●お車なら…
保土ヶ谷バイパス
二俣川IC下車10分
●電車なら…
相鉄本線「三ツ境駅」
宮沢行バス「西村」下車すぐ
つづき整形外科の左奥

◆ご来場お待ちしております。

◆展示会以外のご来店は事前にTEL下さい。

模様が変化する可能性は強いと思います。

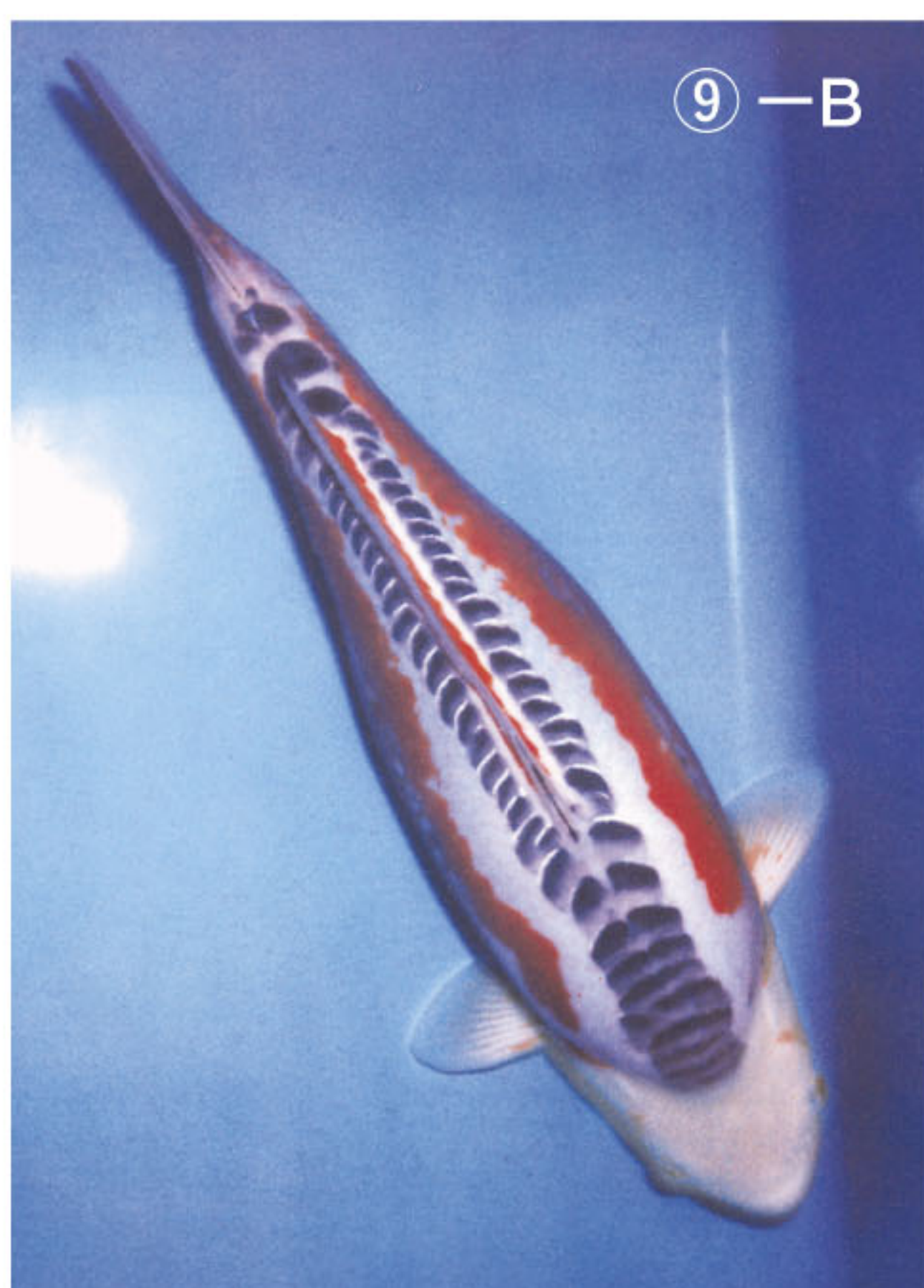
では、これ(写真⑨—C)の年齢をさらに戻して、田圃から揚げた秋の姿は、どうだったかといいますと、これ(写真⑨—D)でした。これは同じ鯉です。鬼鱗も見えません。秋に揚げた15cmあるかないかの姿です。鱗はありますが、体の色と同

じで、まだ発色していないんです。緋模様には面影を持っているくらいです。頭には蒙古斑のような毒がしつかりとあります。

この状態で、秋にうちの店に並んでいたとしても……みなさん全員ご覧になっっているんですが、「欲しい」と言われた方はひとりもいませんでした。それが春になって、この状態



●写真⑨—A／重蔵産の3才。写真イを親にしている



●写真⑨—B／2才時。Aよりも鱗の色が濃い



●写真⑨—C／明け2才時。

●写真⑨—D／当才の秋揚げ時。まだ鱗に色はついていない



(写真⑨—C)で、お嫁に行きました。このように(写真D)色合いが全くないものが、だんだんとはっきり出てくるところに秋翠のおもしろさがあります。

当才の鱗の薄さについて……鱗は透明で、当才の時は薄いですので、鱗の下の方の色をそのまま映し出します。鱗自体は透明人間のようなものです。体の色素を映している程度

の色しかない状態で、鱗の形などは全くわからないんです。虫メガネで良く見ればわかるかもしれませんが、普通はそこまで見ません。

これ(写真D→C)は、かなり劇的な変化だと思います。他の鯉はこれまでデータを取っていませんでした。このお客さんだけが大事に写真を保存されていたので、お目にかけることができました。(次号に続く)